楠・荒田町遺跡第46次発掘調査

神戸市教育委員会文化財課

現地説明会資料

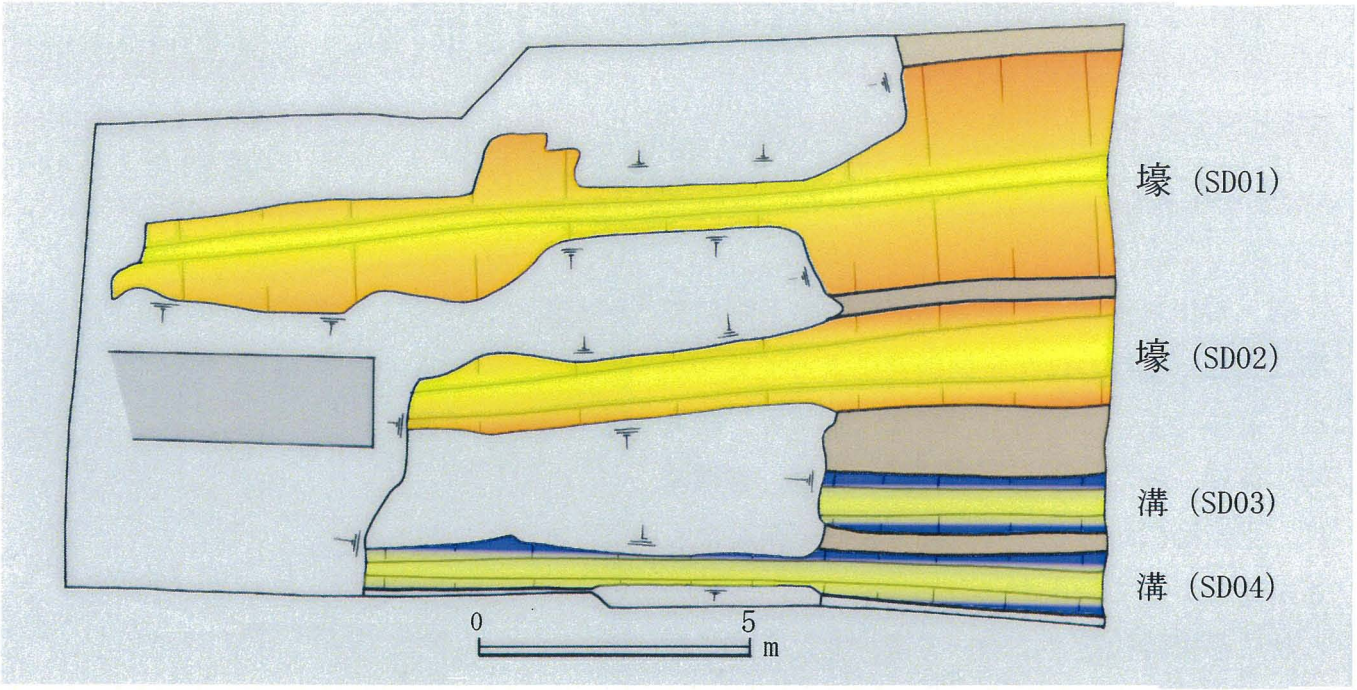
平成22年7月24日

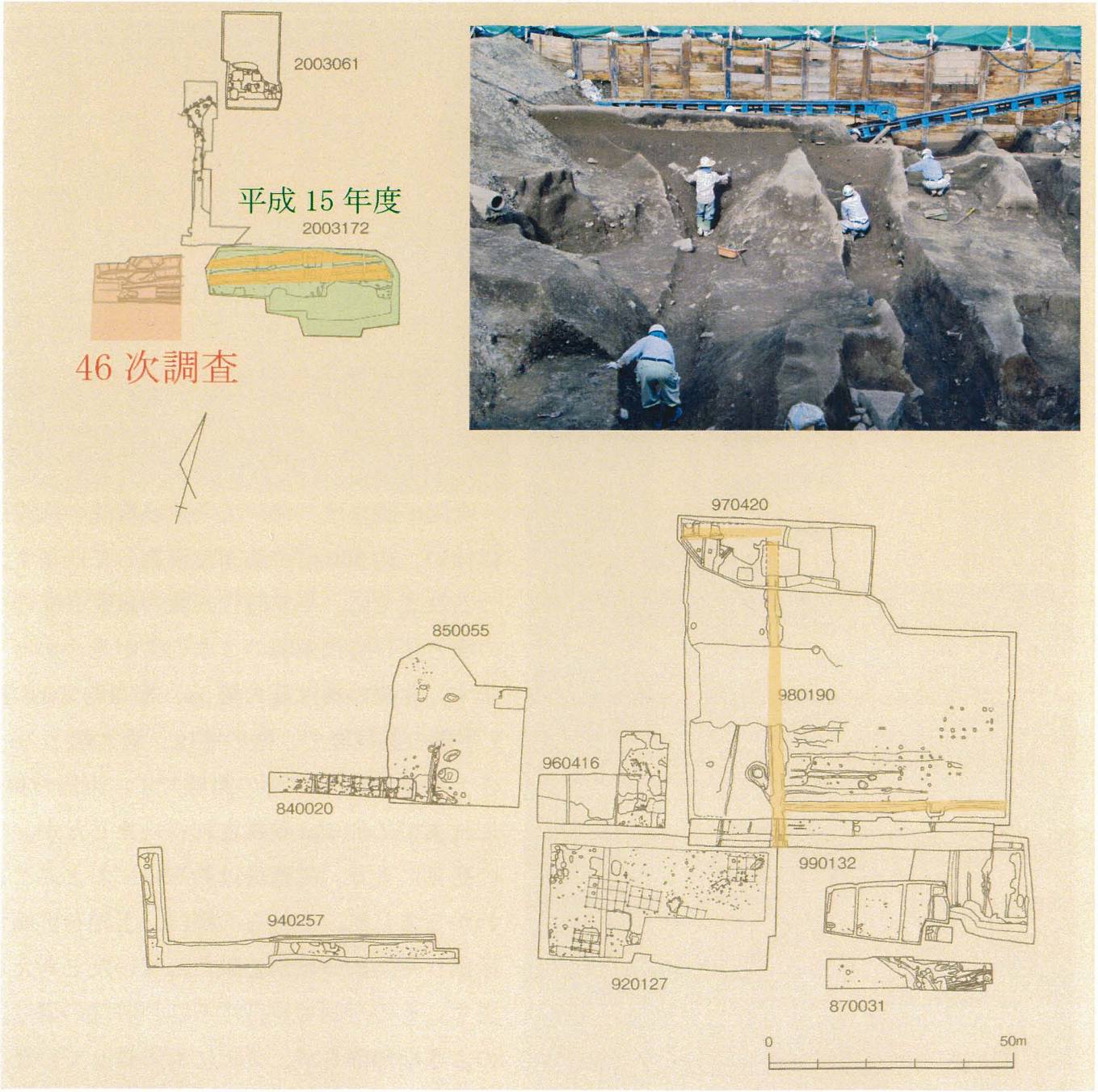
楠・荒田町遺跡は、昭和55年に地下鉄の工事に先だって行われた発掘調査によって見つかった遺跡です。これまでの調査によって、縄文時代後期、晩期、弥生時代前期、中期、古墳時代、平安時代から鎌倉時代の生活の痕跡がたくさん見つかっています。

特に平安時代後半については、北にある祇園遺跡、雪御所遺跡、南の大輪田泊ともに平氏一族による「福原京」関連の遺跡として注目されてきました。また、すぐ南には、古代山陽道が、港との間を東西に貫いており、交通の要所であり、日宋貿易の拠点であったことが、うかがえます。

今回の調査は、神戸大学附属病院の施設建設に伴い、約600㎡の範囲で実施しています。

これまでに、平安時代末頃の東西方向の2本の壕と江戸時代末頃の2本の溝が見つかっています。北側の壕は最大幅3m、深さ約2mの断面V字形の薬研壕で、南の壕は、最大幅2.1m、深さ1.8mの断面U字形の箱壕です。東側の調査でこれまでに約39m確認されていましたが、今回の発見により、総延長は約65mにおよぶことがわかりました。これらの壕は、土地を区画する地割りや防御の役割を果たしていたと考えられます。その南側で並行する江戸時代の溝は、このような地割りが、後世にも影響していたことを示しています。


壕（SD01）
壕（SD02）
溝（SD03）
溝（SD04）
0
5
m


2003061
平成 15 年度
2003172
46 次調査
970420
850055
980190
960416
840020
990132
940257
920127
870031
0
50m